

日本国内の大学における図書館情報学教育および 情報専門職養成に関する調査

宮瀧 智佳子 (文学研究科超域文化学専攻)

Chean Yang Andrew Yew (香港大学教育学研究科)

1 本調査の概要

本稿は、2017年に開始された「諸外国および日本における文化・情報専門職養成の比較研究」の一環として行った、日本国内の大学における図書館情報学教育および情報専門職養成に関する調査報告である。

日本国内の大学におけると述べたが、調査では、日本図書館情報学会による「図書館情報学教育の拡がりと今後の方向性に関する調査報告書(2017年)」¹⁾に掲載された15大学を対象とした。15大学とは、慶応大学、筑波大学、愛知淑徳大学、東洋大学、東京大学、九州大学、愛知大学、青山学院大学、京都大学、駿河台大学、千葉大学、中央大学、鶴見大学、同志社大学、立命館大学で、私立大学が9校、国立大学が6校である。

2 調査方法

調査方法としてWEBリサーチを行い、各大学のホームページ、ゼミもしくは研究室のホームページ、シラバスによって情報収集に努めた。各大学へメールや電話による個別の質問等は行わず、WEBリサーチのみによって調査を行った。

共同研究にあたり、諸外国と日本国内の大学における図書館情報学教育の現状について比較するという目的があったため、国外の大学に関しても同項目の調査をWEB上で行ったが、本稿では筆者の担当した日本国内の大学に関する調査結果のみを報告する。

3 調査項目

主な調査項目は以下である。「大学名」、「プログラム名(コース名)」、「プログラム(コース)の種類」、「プログラム(コース)修了時に授与される称号」、「通学かそうでないか」、「認定」、「所在地」、「学部学科名(大学院の場合は研究科および専攻名)」、「プログラムで使用する言語」、「履修期間」、「卒業論文は必修かそうでないか」、「インターンシップの有無」、「インターンシップは必修かそうでないか」、「インターンシップの期間」、「その他のプログラム」、「プログラム(コース)の定員」、「生徒数」、「授業料」、「留学生の場合の授業料」、「入学時に言語のレベル規定があるか」、「修了に必要な単位数」、「卒業後の進路」、「その他」、「教員人数」に関してWEB上でリサーチを行った。

4 調査結果

調査結果から主な項目をまとめたのが表1である。

まず、日本国内の大学において図書館情報学教育が行われているコースは、文学部または教育学部に属することが多く、独立した学部として図書館情報学教育専門のコースを持つ大学は、情報学群知識情報・図書館学類を持つ筑波大学の1校にとどまった。筑波大学以外の場合、文学部などの学部の下に、専攻もしくはコースとして図書館情報学教育が行われており、入学時から図書館情報学教育を学ぶというよりも、2年次、3年次に各学生が選択した結果として学ぶケースが多いことが明らかになった。修士課程および博士課程の場合は、各

大学ともに図書館情報学教育に関する専門的なコースを設けている。

表1 WEBリサーチ結果の概要

大学	所属	終了までの期間(月)	卒論修論 有無	インターンシップ			定員(人)	生徒数(人) ()内の数字は学年	年間授業料(円) (2017年)	修了に必要な 単位数 (数)	その他
				必修か否か	期間(週)						
A(学部)	文学部	48	必修	有	必修	2	240(4学年合計)	139	1,303,350(1年次) 1,103,250(2年次以降)	128	夜間と夏季スクーリングがあり、1単位は5,000円である。
A(修士)	文学研究科		必修	有	未実施なら必修	2	20(1学年)	7	994,200(1年次) 994,100(2年次以降)	32	
A(社会人向け修士)	同上		必修	有	未実施なら必修	2	20(1学年)	18	994,200(1年次) 994,100(2年次以降)	33	月曜と木曜の夜間と土曜の午後に関連されるナイトコースがある。
A(博士)	同上	36	必修	有	未実施なら必修	2	5(1学年)	6	724,200(1年次) 724,100(2年次以降)	3年間 で12	
A(博士夜間コース)	同上	36	必修	有	未実施なら必修	2	5(1学年)		724,200(1年次) 724,100(2年次以降)	3年間 で12	社会人向けコース。
B(学部)	情報学群知能情報・図書館学類	48	必修	有	選択式	3	100(3年次に10名が追加可能)	461	267,900(半期)	125.5	海外でのインターンシップの場合は10日間。
B(修士)	図書館情報メディア研究科	24	必修				37(1学年)	128	267,900(半期)	30	入学にはTOEICとTOEFLの得点を提出する必要がある。
B(修士)	同上	24	必修				37(1学年)		267,900(半期)	30	
B(修士英語プログラム)	同上	24	必修				37(1学年)		267,900(半期)	30	コースは10月はじまり。
B(修士キャリアアッププログラム)	同上		必修				37(1学年)			30	平日夜間および土曜日に授業が関連。履修証明コースもある。
B(博士)	同上	36	必修				21(1学年)	83	267,900(半期)	10	
C(学部)	人間情報学部	48	必修	無				255(1), 233(2), 240(3), 255(4)	760,000	124	
C(修士)	文化創造研究科	24	必修	無			40(研究科全体)	1	700,000	30	
C(博士)	同上	36	必修	無			6(研究科全体)	2	500,000		修了には3年間の在籍が必要。
D(学部)	社会学部	48		無				167(1), 165(2), 126(3), 134(4)	950,000(1,2年次) 920000(3年次以降)	124	
E(学部)	教育学部	48	必修						535,800(年間)	62	
E(修士)	教育学研究科	24	必修	有	必修ではない		6(おそらく1学年)	2	535,800(年間)	30	
E(博士)	同上	36以上	必修				4(おそらく1学年)	5	535,800(年間)		
F(修士)	総合新領域学府		必修	有	選択式		10(1学年)	14	535,800(年間)	36	社会人も受け入れ。
F(博士)	同上		必修				3(1学年)	11	535,800(年間)	14	
G(学部)	文学部	48	必修					約20(1)	470,000(1年次)	124	
H(学部)	教育人間科学部	48	必修	無				約10	113,4000(1年次) 1,123,000(2年次) 1,127,000(3年次) 1,131,000(4年次)	128	
I(学部)	教育学部	48		無				約15	535,800	156	
J(学部)	メディア情報学部	48		無			約160(学部全体)	約20(1)	555,000(1学期目) 490,000(2学期以降)	124	
K(学部)	文学部	48		無					535,800(年間)		
K	司書課程										
K(修士・博士)	人文公共学府								535,800(年間)		社会人も対象。
L(学部)	文学部	48		無				約50	1,267,300(1年次) 1,027,300(2,3年次) 1,047,300(4年次)	126	
M(学部)	文学部	48	必修	無			60~70(学科全体)	約40	1,470,000(1年次) 1,110,000(2年次以降)	130	
N	司書課程		必修	無					19,000(1科目) 登録料は25,000	34	インターンシップはないが、実習は有り。
N	総合政策研究科		必修				70(研究科全体)	9(1), 8(2)	914,000(1年次) 714,000(2年次以降)	30	
O	文学部	48	必修	無			最大55(1学年)		1,243,000(1年次) 1,103,000(2年次以降)	124	

注: 空欄はWEBリサーチでは把握に至らなかった項目を示す。

各大学とも私立大学、国立大学という違いこそあるが、学費や取得しなければならない単位数に関しては大きな違いは見られなかった。また、各専攻およびコースの定員数は大学のホームページやシラバスにより把握が可能だが、実際に図書館情報学教育の専攻やコースに在籍する生徒数については、具体的な数字が明記されない場合、学部もしくは学科の生徒数のみの記載にとどまった場合が多く、正確な生徒数の把握には至らなかったことをWEBリサーチの限界としてここに述べなければならない。教員については、図書館情報学の専任教員は各専攻に1人か2人の場合が多く、多くの大学では兼任の教員によってコースが支えら

れているといえる。

図書館情報学教育に関して特に言及すべき点として、卒業論文が必修かどうか、インターンシップの有無、夜間コースや期間限定コースの開講による正規学生以外の受け入れ、の3点を挙げる。

1点目の卒業論文の必修化については、15校中10校で卒業論文が必修であり、残りの5校では、卒業論文は必修ではないもしくは選択式、WEBリサーチのみでは必修化についての情報を把握することができないという結果であった。また、卒業論文が必修である10校のうち1校では、卒業論文でなく、卒業制作（卒業プロジェクト）という名前であったが、具体的な内容の把握には至らなかった。

2点目のインターンシップの有無については、必修化されているのは1校にとどまった。また、この大学では、学部時にインターンシップが必修化されており、大学院在籍者でこれまでにインターンシップの経験がない者はインターンシップを行うこととなっている。期間は2週間である。インターンシップは必修ではないが、選択式で希望者は行うことができる大学は2校であった。うち1校は期間の掲載がなかったが、もう1校では、3週間もしくは10日間のインターンシップを行うことができる。その他の大学についてはインターンシップに関する記載を確認できず、実施の有無や必修化に関して断言できない場合が多かった。

3点目の夜間コースや期間限定コースの開講による正規学生以外の受け入れについて、4大学が夜間コースや期間限定コースの開講を行っていることが明らかになった。ここで述べる正規学生とは、4年間にわたる大学への通学によってコースを修了する者を意味する。4大学のうち2大学で夜間スクーリングおよび夏季スクーリングが行われており、1科目の受講料は5000円である。この大学では、大学院の夜間スクーリングと土曜日にもスクーリングを行っており、平日や日中の受講が困難な社会人を対象にしていると考えられる。別の大学では、キャリアアッププログラムと履修証明コースを開講しており、キャリアアッププログラムは平日夜間および土曜日に開講される。大学院では長期履修生を受け入れており、長期履修生になることで2年間にわたる修士課程を3年もしくは4年間かけて修了することができる。この際支払う授業料は通常の修士課程分の2年分である。その他の2大学では、社会人を受け入れていること、通常の4年コースとは異なる教育プログラムがあることは明らかになったが、詳細について把握することはできなかった。

以上のことから、日本国内の大学における図書館情報学教育および情報専門職養成についてまとめると、図書館情報学を専門的に学ぶことのできる大学は限られており、さらに社会人など正規学生以外を受け入れる体制も、すべての大学で整っているわけではないということが明らかになった。そしてこれは今後の課題とも捉えることができる。図書館情報学教育のコースや専攻は先述したように文学部や教育学部の下に属す場合が多く、独立して存在するわけではない。このため、学生は4年間を通して図書館情報学の専門を身に着けるのではなく、3年次、4年次から専門的な勉強を始めることが多いと考えられるが、卒業論文やインターンシップの必修化によって、学んだことを実際に現場で実践することが求められる。また、正規学生のみではなく、一度社会へ出た者へ再び学びを提供する場として、夜間や期間限定のスクーリングを設けることも、大学が図書館情報学教育を行う上で重要であり、大学への入り口を広くするという点においても今後の課題であろう。

最後に、本報告は、調査のデータを整理して提供することを目的としたものであり、先行研究に関する調査や考察が不十分であるが、今後改めてその点を含めた研究がされることを期待している。

本調査は、2017年度立教大学学術推進特別重点資金（立教 SFR）共同プロジェクト研究を受けて実現したものである（「諸外国および日本における文化・情報専門職養成の比較研究」；中村百合子、川口幸也、上田修一、佐藤真実子、趙格華（Dickson K. W. CHIU））。ここに記して感謝申しあげます。

¹⁾ 日本図書館情報学会図書館情報学教育に資する事業ワーキンググループ「図書館情報学教育の拡がり」と今後の方向性に関する調査報告書」2017.3.

<http://old.jslis.jp/publications/JS LIS-EduWG-Report.pdf> , (参照 2019-03-26).